様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０８９１２

研究課題名（和文）ケアマネジャー向けアドバンス･ケア･プランニング面接技能教育プログラムの開発

研究課題名（英文）A pilot advance care planning (ACP) communication training workshop for care managers in Japan

研究代表者
平川　仁尚（hirakawa, yoshihisa）

名古屋大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：００３７８１６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：ケアマネジャー向けアドバンス･ケア･プランニング面接技能教育プログラムを試作し、秋田、名古屋、姫路、徳島など全国で実施した。4時間30分のプログラムで、セッションは、1)講義、2)延命・救命処置の模擬面接、3)がん患者・非がん患者とのACPの話し合いのタイミングや切り出し方に関するシミュレーション、4)生き方や人生の歴史（ライフ・ヒストリー）取材であった。本研究の効果について、アンケート調査やインタビュー調査により、参加者の実践的面接技能を向上させ、現場でも活用できることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ACPは、いわゆる「終活」における「お看取りノート」などの用語で知られているものである。欧米では、医療者やソーシャルワーカーを対象にした標準的ACP教育プログラムがある。我が国では、医療者を主な対象としたACP教育プログラムが全国展開されている。本プログラムは高齢者のACP 作成支援者として非医療者であるケアマネジャーに着目した点が特徴的である。既存のケアマネジャー研修に本プログラムを組み込むことで、ACP 普及を加速させるものと期待する。

研究成果の概要（英文）：The ACP educational program content was developed and conducted in Akita, Nagoya, Himeji, and Tokushima. The face-to-face program consisted of one 30 m lecture and three 1 h sessions: a role play session in which pairs of participants practiced giving information on artificial nutrition and cardiopulmonary resuscitation by using pictures in an ACP interview, a role play session with two scenarios in which participants learned how to start and keep an ACP conversation with cancer or non-cancer older patients, and case studies and discussions of two individuals with a unique life story. Quantitative and qualitative data on learning impacts were analyzed comparing pre, post, and follow-up examination. The study proved the impacts of the community-based, easily disseminatable, and efficient ACP educational program on attitudes and practices of Japanese care managers.

研究分野：高齢者医療（老年医学）

キーワード：在宅ケア　ケアマネジャー　エンド・オブ・ライフ　ワークショップ　尊厳　その人らしさ　高齢者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

アドバンス・ケア・プランニング(ACP)は、口頭もしくは書面で残された終末期のケアの希望に沿ってケアを提供するプロセス全体を指す。ACP を明示することにより、高齢者本人は自身の希望に沿ったケアを受けることができる。一方、家族やケア提供者にとっては本人の希望に沿ったケアを提供できたと感じることができる。しかし、日本では ACP は十分に普及していない。そこで、今回、高齢者の ACP 作成支援者としてケアマネジャーに着目した。ケアマネジャーは、利用者のニーズの把握とそれに基づくケア計画の立案、モニタリングを通じて、高齢者の人生の終末期の初期段階から関わることが多い。裾野の広さ、関わりの深さ、自宅への訪問頻度、面接に割ける時間的余裕から考えて、ケアマネジャーは医師や看護師よりも良き ACP 作成支援者になれる可能性は大きいと考えている。しかし、その多くは非医療系ケアマネジャーであり、死や終末期について高齢者や家族と話し合うための教育をほとんど受けていない。ところで、高齢者と ACP の面接を円滑に行うには、ACP に関する知識のみならず、高齢者が ACP について話しやすいと感じる雰囲気を作れる態度、“少ない言葉から思いを汲み取れる”技能の習得が欠かせない。とりわけ、初回面接・相談（インテーク）は、ケアマネジャーにとって、そのような雰囲気づくりと信頼関係（ラ・ポール）の形成を行う上で重要な機会である。

２．研究の目的

本研究では、医学教育分野でシミュレーショントレーニング・テストに広く用いられている SP と OSCE を導入し、ケアマネジャーが実際の現場で ACP に関する初回面接をする際の知識、態度、技能をバランスよく習得するための実践的教育プログラムを開発することを目的とした。非がん患者とのコミュニケーションに焦点を当てた点で独創的である。将来的に、既存のケアマネジャー研修に本研究の成果が生かされ、ACP 普及を加速させるものと期待する。

３．研究の方法

本研究では、参加者に ACP インタビュートレーニングプログラムを受けてもらい、混合研究法を用いて教育効果を評価した。プログラムは、講義、ロールプレイとデブリーフィング、グループ討論で構成された。参加者はケアマネジャーとしたが、看護師やソーシャルワーカーも参加可能とした。実施場所は、秋田県、愛知県、岐阜県、兵庫県、徳島県で、実施時期は、2019 年 1 月から 2019 年 9 月までであった。

本プログラムは、研究代表者らの先行研究や臨床・教育経験を基に開発した。プログラムの校正は、30 分の講義、3 種類の 1 時間のロールプレイセッション、そして 2 人の高齢者のライフヒストリーを基にしたグループ討論であった。講義は、リビングウィル、アドバンス・ディレクティブ、アドバンス・ケア・プランニングの基礎知識や Good Death の定義などであった。ロールプレイのセッション 1 では、参加者が二人一組となり、人工栄養療法と心肺蘇生の希望について高齢者や家族と話し合うという設定でロールプレイを行い、デブリーフィングを評価者から受けた。セッション 2 では、がん患者と非がん患者の 2 つのシナリオ表 1 で、退院後初回に ACP の話し合いを行うという設定でロールプレイを行い、デブリーフィングを評価者から受けた。最後のライフヒストリーを基にしたグループ討論では、2 人の高齢者のライフヒストリーについてフォーカスグループディスカッションを行い、質的データ収集とその分析法について学んだ。

本プログラムの効果判定のため、プログラムの前後、そしてフォローアップとして 3 か月後に評価を行った。プログラムの前後に、質問紙を用いて量的な評価を行った。質問紙は、the short form of the Frommelt Attitude Toward Care of the Dying scale, Form B - Japanese version (FATCOD-Form

B-J)、Palliative Care Knowledge Test などで構成された。また、プログラム後に、プログラムの感想と改善点について参加者に発言を求めた。3 か月後に、実際の現場で実践した際に感じたプログラムの効果について自由記載のアンケートもしくはインタビューで質的な評価を行った。

量的データの分析には、IBM SPSS Statistics for Windows, Version 24.0 (IBM Corp, Armonk, NY, USA)を用いて、プログラムの前後で比較を行った。質的データの分析には、質的内容分析 Qualitative Content Analysis を用いた。

４．研究成果

表 1.ロールプレイシナリオ(例)

がん患者シナリオ
狙い
退院の初回面談の際にアドバンス・ケア・プランニングを説明する
場面設定
患者は、鈴木太郎、７３歳男性、肺癌。妻７０歳、長男４８歳、次男４５歳（2 人とも独立して県外在住）。
外来で化学線療法を受けていたが、脊椎への骨転移が判明したため入院して放射線治療を受けた。転移により寝ていることが多かったため、下肢の筋力が低下し、歩行困難となった。そこで、ケアマネジャーを紹介され、介護保険を導入して、自宅へ戻ることになった。
退院１週間後、ケアマネジャー（ケアマネ）A が自宅を初回訪問し、アドバンス・ケア・プランニングの相談を鈴木さんと二人きりですることとなった。
患者の想い
とにかくつらい。治る見込みがないのに化学療法を続けたくない。そんなことより家でゆっくりしていたい。治療を続けて欲しいという妻の気持ちはわからなくもないが、とやかく言われるのがうっとうしい。
妻の想い
夫に少しでも長生きして欲しいので、治療を続けて欲しい。夫が治療をしたがらないので、ケアマネジャーから説得して欲しい。
非がん患者シナリオ
狙い
誤嚥性肺炎で入院し、退院初回面談の際にアドバンス・ケア・プランニングを説明する
場面設定
患者は、田中晴子、８５歳女性、脳血管障害で片麻痺あり、認知症なし。食事・トイレは自立している。夫は他界（８３歳、５年前に胃がん）し、現在息子６０歳、嫁５８歳と同居。女孫３０歳（他県で就職）。
食事の支度は嫁がしている。デイケアを週１回利用している。入浴は、デイケアと、家族の見

守りにより自宅で行っている。
最近、飲み込みが悪く、ときどきむせがみられる。食欲が低下し、体重が減少している。２～**３ヶ月に１回、誤嚥性肺炎で入退院を繰り返しており、今回が５回目。**
ケアマネジャー（ケアマネ）B としては、これまでは何とか入院をさせてもらえたが、今後受け入れてもらえる病院があるかどうか分からないので、今後のことを早く田中さんと話し合って決めておきたい。そこで、退院後初回の訪問で、アドバンス・ケア・プランニングの相談を田中さんと二人きりですることにした。
患者の想い
また肺炎になったら病院にお世話になり、治してもらう、そんな生活が続くと思っている。この先の心配はしていない。
家族（息子、嫁）の想い
良く分からないので、母の望むようにしてあげたい。最近食事を残す事が多いので心配している。

計 120 **名の参加者を得た。参加者の属性を表** 2 **に示した。**

表 2.　(n=120)

平均値±SD **または** n	
年齢	45.5±9.37
性別 (女)	97
場所（県）	
秋田	23
岐阜	45
愛知	22
兵庫	8
徳島	22
職種	
ケアマネジャー	52
ソーシャルワーカー	5
介護福祉士	40
医師	1
看護師	18
その他	4

プログラム前後における態度の変化の結果を表 3 **に示した。**

表 3. **プログラム前後における得点の変化** (n=120)

	前	**後**	p **値**

困難感＊1	1	2.73±0.89	1.95±1.00	0.000
	2	2.78±1.02	2.06±0.97	0.000
	3	2.13±0.92	1.49±0.83	0.000
	4	2.41±0.91	1.89±0.90	0.000
	5	1.60±0.95	1.27±0.77	0.007
fatcod＊2	1	7.56±1.69	8.18±1.88	0.010
	2	7.80±1.85	7.69±2.07	0.653

＊1　1 話し合いを始めるタイミングが分からない
　　2 延命治療、救命処置について家族に分かりやすく説明する自信がない
　　3 医療行為の話なので、本来なら医師が説明すべき内容だと思う
　　4 話し合う時間が十分にない
　　5 尊厳のある、本人らしいケアをと言われても理想論だと思う
＊2　1 死にゆく患者へのケアの前向きさ
　　2 患者・家族を中心とするケアの認識

本プログラムに参加した全参加者 121 名を対象にデータ分析を行い、効果判定を行った。つまりプログラム参加前後に実施した、Short form of the Frommelt Attitude Toward Care of the Dying scale, Form B – Japanese version と Palliative Care Knowledge Test を改変した質問紙票の得点の変化を分析した。また約 3 か月後に ACP 実践活動の変化についてフォーカスグループインタビューを実施し、その質的データを分析した（質的内容分析）。 その結果、ACP の基礎知識と態度領域の項目で、得点の変化に有意差がみられた。本プログラムによって参加者は、「普段の雑談の中から利用者の本当の希望を推察するヒントを得ることができること」、「ケアマネジャーも医療行為の説明をする準備をしておかなければいけないこと」などを学んだ。また、3 か月後のフォローアップインタビュー内容の質的分析の結果、実際の現場で「ACP について利用者や家族と話す機会を持つようになった」、「家族の意見に惑わされることなく、本人ならどう考えるかを常に意識するようになった」、「何気ない会話の中から本人や家族の想いを拾い出そうと意識するようになった」などを実感していたことが分かった。
以上のように、本プログラムの効果について、アンケート調査やインタビュー調査により、参加者の実践的面接技能を向上させ、現場でも活用できることが確認された。この結果を踏まえ、英語論文を執筆中である。引き続き本プログラムの開催を希望する地域と協力しながら、データの蓄積、プログラムの改変を行っていく予定である。また、この成果を活かして、ACP のユニバーサル化、つまりケアマネジャーなど ACP に携わる専門職が行ったインタビュー内容を質的に自動分析し、ポートフォリオとして出力できるシステムの開発につなげたい。

〈引用文献〉

① 田中裕子,木澤義之,坂下明大 アドバンス・ケア・プランニングと臨床倫理に関する研修会の実施とその評価 palliative care research 2015;10(3):310-314
② 濱吉美穂, 河野あゆみ 地域高齢者に対する邦訳版 Advance Directive 知識度尺度と態度尺度の信頼性・妥当性の検討 日本地域看護学会誌 2014;Vol.16 No.3,
③ 中井裕子, 宮下光令, 笹原朋代, 小山友里江, 清水陽一, 河正子 Frommelt のターミナルケア態度尺度 日本語版(FATCOD- B-J)の因子構造と信頼性の検討 ― 尺度翻訳から一般病院での看護師調査、短縮版の作成まで―. がん看護. 2006; 11(6): 723-729.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Hirakawa Y, Chiang C, Yasuda Uemura M, Aoyama A.	４．巻 14
２．論文標題 Involvement of Japanese care managers and social workers in advance care planning.	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Social Work in End-of-Life & Palliative Care	６．最初と最後の頁 315-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15524256.2018.1533912.	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 平川仁尚	４．巻 21
２．論文標題 ケアマネジャー向けアドバンス・ケア・プランニング面接技能教育プログラムの開発	５．発行年 2019年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	安藤　秀明 (ANDO Hideaki) (00323147)	秋田大学・医学系研究科・教授 (11401)	
研究分担者	阿部　恵子 (ABE Keiko) (00444274)	愛知医科大学・看護学部・教授 (33920)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	江　啓発 (KOU Keihatsu) (20713887)	名古屋大学・医学系研究科・講師 (13901)	
研究分担者	青山　温子 (AOYAMA Atuko) (40184056)	名古屋大学・医学系研究科・教授 (13901)	
研究分担者	阿部　泰之 (ABE Yasushi) (40447090)	旭川医科大学・大学病院・講師 (10107)	